

Kの自殺を考える

Kの彷徨

(1) Kの信念

「意志の力を養って強い人間になるのが自分の考えだと云うのです。」[22]
「彼の性質として、議論がそこまで行くと容易に後へは返りません。なお先へ出ます。そうして、口で先へ出た通りを、行為で実現しにかかります。彼はこうなると恐るべき男でした。偉大でした。自分で自分を破壊しつつ進みます。」[24]
「精神的に向上心のないものは馬鹿だと云って、……。」[30]
「道のためにはすべてを犠牲にすべきものだというのが彼の第一信条なのです。ですから、節欲や禁欲はむしろ、たとい欲を離れた恋そのものでも道の妨げになるのです。」[41]

これらの信念は、Kの死の直前まで変わることなく持っていたのである。

私の策略にはめられて、やり込められたときのこと、Kの遺書の内容を見れば分かるであろう。お嬢さんのことを好きになった後でも、「道」または「道を歩んで来た自分の過去」は捨てきれなかったのである。

(2) Kの性格

思慮深い(内省的)

- (1) 無口である。(話そうとするときに一度考えて、言葉を選んでいる。)
- (2) 有言実行。(自分が実行すること、実行しようと思うことしか口に出さない。)
- (3) 言葉に重みがある。(よく頭の中で練られたものなので、説得力があり、矛盾がない。)
- (4) 自信がある。(頭の中で練るので、その結果に関しては責任が持てる。)

自分本位

- (5) 他人を思いやらない。
- (6) 他人を干渉しない。(他人のことには興味がない。自分の道にしか興味がない。)
- (7) 他人の意見を求めない。(自分で自分のことを決められるので、求める必要がない。)
- (8) 内面を外に出さない。(内省的であり、自分本位であるので、外に出す必要がない。)
- (9) 友人が少ない。

道のために思慮深くなり、自信がつき、自分本位になると考えられる。つまり、「思慮深さ」のために「自分本位」となるのである。

この二つに関しては、死の直前になると変化している。「思慮深さ」はお嬢さんを好きになった後でも変化していないが、「自分本位」に関しては、徐々に変化しているのである。

[35]「Kは不意に仕切りのふすまを開けて私と顔を見合わせました。」

「するとKのほうからつかつかと私の座敷へ入ってきて、私のあたっている火鉢の前に座り込みました。」

[36]「私は苦しくてたまりませんでした。おそらくその苦しさは、大きな広告のように、私の顔の上にはつきりした字で張り付けられてあったろうと私は思うのです。いくらKでもそこに気のつかないはずはないのですが、彼はまた彼で、自分のことに一切を集中しているから、私の表情などの注意する暇がなかったのでしょうか。」

というように、Kが自白をする場面は私に対する思いやりや、礼儀が全く欠けているということが分かる。

ところが、次にK側に働きかける場面から、次の点が変わってきている。

(7)「他人の意見を求めない」

[40]「彼は私に向かって、ただ漠然と、どう思うというのです。どう思うというのは、そうした恋愛のふちに陥った彼を、どんな目で私が眺めるかという質問なのです。一言で云つと、彼は現在の自分について、私の批判を求めたいようなのです。」

(8)「内面を外に出さない」

[40]「彼はただ苦しいと言っただけでした。実際彼の表情には苦しそうな所がありありと見えていました。」

(5)「他人を思いやらない」

[49]「彼はいつもの通り今帰ったのかとは言いませんでした。『病気はもういいのか、医者へでも行ったのか。』と聞きました。」

[48]遺書の内容は、私に対する礼、奥さんへ対するわびが書かれていた。

(6)「他人を干渉しない」

[46]「それをKは不思議そうに聞いていました。しまいはどうしたのかと奥さんに尋ねました。奥さんはおおかた決まりが悪いのだろうと言って、ちょっと私の顔を見ました。Kはなを不思議そうに、何で決まりが悪いのかと追求しにかりました。」

ということは、[36]と[40]の間に変化のきっかけが隠されているのである。その間に、Kが初めて内心を表情に表した部分がある。

「38」すると今度はお嬢さんがKに同じ問いを掛けました。Kは私のように心持が悪いとは答えません。ただ口が利きたくないからだと言いました。お嬢さんはなぜ口が利きたくないのかと追窮しました。……Kの唇は例のように少し震えていました。……お嬢さんは笑いながらまた何か難しいことを考えているのだからと言いました。Kの顔は心持ち薄赤くなりました。」

「例のように少し震えていました。」

何か言おうとしている。

お嬢さんの問いかけに対する答えだから、自分のお嬢さんへの思いを伝えようとしたのかも知れない。

しかしすぐその後、お嬢さんは「また何か難しいことを考えているだろう」と言っている。「また」ということは、「前も」ということである。Kとお嬢さんは室で二人きりで、よく話していた。ただお嬢さんが一方的に話していたということではないだろう。Kも自分から話さなくては、そう頻繁にお嬢さんもKの室に出入りしないはずである。Kは何を話していたかという点、学問や自分の道の話しかできるはずがないので、お嬢さんにとって「難しい」話なのである。

お嬢さんにとって「難しい」話（＝学問・自分の道）をお嬢さんは笑いながら聞いていたのである。Kは自分が今までお嬢さんに話していた話を「難しい話」といつて片づけられたことに対して、「心持ち薄赤く」なったと考えられるのである。

Kはどうしてお嬢さんのことを好きになったのか。Kは自分の道にまっしぐらに進んでいた。それに対する理解者は私と思われるが、実は私はKの道に対しては「人間らしくない」というような批判をしている。Kは私に自分の道を話すが、話し相手にはなっても、理解者にはなり得なかったのである。

ところがそこでお嬢さんが出現した。お嬢さんは「道」の話の内容が分からなくとも私に話し相手になってくれと言われ、お嬢さんにとつての「難しい話」を笑いながら聞いていたのである。それをKは一生涯に初めて出てきた自分の「理解者」だと思いきんだはずである。それでお嬢さんを好きになったのではないか。

しかし、お嬢さんの「また何か難しい事を考えているのだろう」という発言により、実はお嬢さんは自分の理解者ではないということに気がついた。気がついたと同時に自分のお嬢さんに対する恋愛や道を疑いだしたのである。「果たして自分が歩んできた道はそれでもいいのだろうか？」と。それが「薄赤くなりました」という表記なのである。

「38」以降、Kから「恋愛」という事に関する言葉は一切現れていないのである。「40」にあるKが私に批判を求めるシーンでは、Kは「ただ漠然と」「どう思う」といつているだけである。その後の「どう思う」というのは、そうした恋愛のふちに陥った彼を、どんな目で私が眺めるかという質問なのです。「というの、私の解釈であり、実は少しずれていたのである。Kは「このように道にも進めないでいる自分を『どう思う』』と言う意味で言ったのではないだろうか？だから

「自分の弱い人間であるのが実際恥ずかしい」

「迷っているから自分で自分が分からなくなってしまったので、私に公平な批評を求めるとよりほかにしかたがない」

という発言になるのである。「恋」に関する言葉は一切出ていない。

お嬢さんの態度を誤解することにより、自分の恋愛は誤解に基づいていたことに気づかされた。そして「誤解」によって崩される自分の「道」も実は「誤解」なのではないか？と疑い始めたのである。

「道」がなくなつた自分は「弱い人間」であり、「迷い」、「自分で自分が分からなくなつたのである」。

Kの自殺の理由

「私はしまいにはKが私のようにたった一人で淋しくてしかたがなくなりました結果、急に処決したのではなかるうかと疑いだしました。そうしてまたぞつとしたのです。私もKの歩いた路を、Kと同じように辿っているのだという予覚が、折々風のように私の胸を横切り始めたからです。」[53]

私も自殺をするのだが、私の自殺を考えると、Kの自殺も分かってくると思うので、まず私の自殺を考えていく。

「私はただ人間の罪というものを深く感じたのです。」[54]
「私は妻に向かつてもし自分が殉死するならば、明治の精神に殉死するつもりだと答えました。」[55]

【殉死】……主君が死んだとき、臣下がその後を追って自殺すること。

乃木大将は西南戦争で負けてその時に死のうと思つたが、死ぬぎっかけがなく、明治天皇が死んだことをきっかけに死んだのである。

私は自分がKにしたこと（人間の罪：人間の心深くに棲む利己心等）で死のうと思つたが、「死んだ気で生きていこうと決心」[54]した。しかし、明治天皇の崩御があり、「明治の精神に殉死するつもりだ」[56]と言ひだし、自分の中に棲む「人間の罪」を「私（書生）」に伝えて死んだのである。

Kの自己の理想が崩壊した。崩壊して、新たな道を歩めばいいが、私の言つた「殉死」と同じような考えを持つたのである。Kにとつて理想に向かつていた「道」とは歩まねばならないものであり、尊いものである。それがお嬢さんを好きになることで崩壊したのである。

尊いものが崩壊したとき、それを省みず捨てることはなかなかできないものである。尊いものは尊いままでおこうとするはずである。尊いまましておくには、これ以上の崩壊をどうめるしかないのであつた。

崩壊して行く道を見失つたKは、「自分の理想に殉死」したのではないだろうか？

よりどころのなくなつたKは独りぼちであるし、「淋しくつてしかたがない」はずである。お嬢さんを好きになつた時点ですでに「理想」は崩壊してしたが、お嬢さんへの思いがKのすべてを支配していたため、「淋しさ」は生まれていない。ところがお嬢さんへの思いも崩壊した今、「淋しさ」しか残らないのである。

「淋しさ」により自殺したKを救つてやれなかつたのは「私」である。むしろさらに孤独に陥らせるようなことをしたのである。（Kに話もせずお嬢さんと婚約）だから、それもKの自殺の要因になつたであろう。要するに、Kに対する働きかけはすべて自殺の要因になつたのである。だれもKの力にならうとはしなかつたのだから。